

令和3年度 第3号

学びへのまなざし

通級指導教室での子ども達との学びを通して感じた子育てのエッセンスを不定期ではありますが紹介していきたいと思います。

京都市立神川中学校 通級指導教室
担当 玉置宣子

オリンピックの感動をもたらしたのは,,

今年の夏は、色々な意味で「二度と経験できない夏休み」となりました。オリンピックの自国開催、しかもテレビでの応援のみ。それでも自国開催のおかげで多くの競技をライブ中継で見ることが出来ました。

私は、今回の日本選手の活躍、多くのメダル獲得の要因となったのは、選手たちの中にあった「感謝の心」だと感じています。困難なコロナ禍で、ようやく開催となった今回のオリンピックは、今までにない気付きを多くの選手にもたらしたのではないのでしょうか。全てのことが、「当たり前じゃない = ありがたいこと」と考えた時に、感動的な結果がうまれるのだと、今回感じさせてもらいました。

柔道で連覇を果たした大野将平選手の言葉が印象的でした。

「(五輪開催に)賛否両論あることは理解しています。ですが、われわれアスリートの姿を見て、何か心が動く瞬間があれば、本当に光栄に思います」

オリンピック自国開催という、またとない機会に、子ども達の心が動いていることを祈りたいと思います。



原点に返って ～児童文学『兔の眼』に学ぶ～

この夏、久しぶりにある本を手に入れました。灰谷健次郎さんの『兔の眼』です。昭和59年の発行で、私が学生時代に、教師を目指すきっかけのひとつとなった本です。今回読み直してみても、また改めて感動しました。

乱暴な言葉もたくさんあって、時代の移り変わりを感じますが、根底に流れる温かいものは全く変わりません。

この時代には「特別支援教育」というものはありませんでした。しかし、この本に登場する「小谷先生」という若くて真っすぐな女性教員は、言葉を発せず読み書きのできない、そして廃棄物処理所に住む小学校1年生の「鉄三ちゃん」に、好きなハエの名前と研究を通して、読み書きや感情表現を習得させていきます。また、「みなこちゃん」という知的障害のある生徒が転入してきたときには、クラスみんなで話し合い、生徒たち自らみなこちゃんのお世話当番を決めて関わり、皆が変容していく姿が生き生きと描かれています。

みなこちゃんの入級によって、みんなの学習が遅れると担任の小谷先生に抗議をした保護者が、クラスで成長した息子の姿を通して変容し、終盤で話をされた言葉が印象的でした。

ひとのことなどしらん顔していた子が、他人のことでなやむようになり、考えるようになったのです。(中略)

一部の子どものためにみんながめいわくをこうむる、私たちははじめそう考えていたのです。しかし、それはまちがいでした。よわいもの、力のないものを疎外したら、疎外したものが人間としてダメになる。

この本に描かれている「小谷先生」と、もう一人「足立先生」という先輩の、子ども達を深く理解し、温かく包み込むストーリーに、私自身改めて教育の原点に立ち返り、2学期からの活力をもらいました。

今年は、『東京オリンピック』と『兔の眼』で、心に残る、感動の夏になりました。



通級指導教室に関するご質問やご相談は、学級担任もしくは通級指導担当の玉置までお問い合わせください。